

自由討論

●一司会（加々美） はじめに私から簡単なコメントをしたいと思います。岡山さんの文学精神の問題、とりわけてすべての価値を転倒させる「無」の存在に関して、少しお話ししたいと思います。北京生活のなかで、社会的に無力な存在ほど既存の社会秩序に包摂されないエネルギーをつかむ契機があると、岡山さんは指摘されました。

実は、竹内の言葉に、「言葉の不自由を知りつつ一片真切の言葉をはく」というのがあります。つまり、そのときに、なぜ竹内は言葉の非存在、言葉の不自由を自覚しつつ、一片真切というのか。一片真切の言葉というのは、とつとつとしか語られないものですが、そのようなことを強調するのかというと、それは自己の存在の社会的な無力性、彼が語る社会的無力な存在とは無縁ではなく、社会的無力な存在という地平から価値を転倒させていくという方法を指しているのです。それを贖罪の文学と言っても構いません。

私も26歳のときに、香港に1年間滞在したことがあります。そのときに、湿度が高く暑い香港のまちを徘徊しながら、26歳の自分が社会的に無力な存在であることを感じました。私の研究の原点の1つに、この香港での1年間の滞在があります。

今日、岡山さんの話を聞きながら、私自身も竹内の同じような部分に触れていましたので、その点に思いを致した次第です。

ただそのときに、無力な存在とは言っても、それは等身大の自分のことで、具体的に血肉を持つ自分に戻ってきます。文学者に限りませんが、知的営みをおこなう人々は、社会的無力であって、等身大、血肉、単にこの体だけでも持っているとい

う自己存在をどこかに忘却していく、大きく言えば、その忘却が集まり飛躍、飛翔となって、国家、あるいは民族へと伸び上がっていきます。しかし、それを常に元に引き戻すというのが、一片真切の言葉ということであるかと思います。

そのような意味で、具体相としての中国ということ。具体相というのは、一見すると目に見えて手に触れてと考えられると思いますが、現実には中国の革命を彩る中国、あるいは中国の民族、明治維新以降の日本といったようなものは、必ずしも一片真切の言葉をはく、そういう人間存在からすれば、意識のうえでは遠い距離にあるわけです。このような2つの問題を、薛毅さんの場合は、そういう意味では境界のギリギリのところを話されながら政治の世界、社会的無力な存在というかたちで語られた竹内と、そこから伸びあがった政治の問題の境界のギリギリのところをたどった議論だと思いました。とりあえず、私のコメントは以上です。

どなたからでも結構です。昨日の議論もありますので、自由に討論していただいて構いませんが、最初に岡山さんの議論に何かコメントがありましたらお願いします。鶴見さんから何か一言お願いします。

●一鶴見 15歳のときの竹内訳の『魯迅』を読んで、その翻訳者の言葉に惹かれたと。考えを誘う文体に惹かれたということですね。15歳のときからだから、今、何歳かは知りませんが、18年くらい経っているのでしょうか。その間、ずっと持続する人がいるのですね。日本人としては珍しいですね。私は、日本の知識人を非常に低く評価しています。珍しいです。国家とともにずっと



歩むならばできます。1年の反逆のあとの1969年、1970年の苦渋ということは、日本の知識人に普通にあることです。

しかし、15歳から18年、自分で竹内研究の基になっていくということは、1億2,000万人のなかの非常に優れた方がここにいるのだなと思いました。低く評価している日本の知識人のなかで、このような人がいるのだなということに感銘しました。

●—司会 それでは、張寧さんが出された問題について、菅さんの出された、また松本さんが出されるであろう論点に近づく問題だと思いますので、まず、菅さんからお願いします。

●—菅 薛毅さんの最後の問いかけが非常にショックでした。文化大革命に対して、確かに竹内好はほとんど黙っていました。「それはなぜだったのだろうか」という重大な問いで、おそらく竹内さんがもう一度変わるとすれば、文革への応答が出た場合であったに違いないと思います。しかし、そうならなかった。晩年の竹内さんに少しだけ接した身としては、それまでの長い中国との付き合いが、竹内さんに覆い被さっていたために、論理の問題とは別に、見解表明が憚られたためではないか、と思います。目の前にいる人が文化大革命の当事者だったり、政権の当事者だったり、批判されている人だったりということになると、意見は言い辛いですよね。たとえば喬冠華という外務大臣が来日したことがありました。そのことがある座談会で話題にされたのですが、この外相

も竹内さんの昔からの知り合いだと言うのです。おそらく対立する両陣営のなかに山のように知己、友人がいて、そのことだけで絶句を強いられるということが、竹内さんの思想的な原理とか文学精神の手前にあっただろうと思います。月並な配慮とか、そういうことではなくて、たぶん、どの立場も判ってしまう。そういうことだったのでないか。こういっても竹内さんを低めることにならないと思います。両派に当事者がいて、それぞれ理解できてしまうとしたら、何もいえないですよ。非常に残念なことです、そうだったのでないかと思います。

そういうことは、もちろん文化大革命だけに限らなかったでしょう。戦後の中国に革命が成立して、それ以降、日本にも、中国にも、日中関係にも、好ましからざる展開があって、しだいに中国の様子も変わってきます。日中の現実の関係の規定力が日中の連帯を担わなければならない当事者の手から離れて、日中国交回復さえもが、政府へと機軸が移っていきました。それをどうすることもできないなかで、さまざまなことに沈黙を強いられていったのだと思います。

文化大革命に関して、苦渋が一番大きかったのではないかと思います。

●—司会 では、松本さん。

●—松本 最初に岡山さんの報告を聞いていて、私が10代の終わりに竹内好の「近代とは何か」、最初のタイトルは「日本の近代と中国の近代」だったと思います。あとで改題したと思います。そのなかから、岡山さんがひいている後半の部分だけをもう一度言いますと、「絶えず新しさを求め、絶えず新しくなろうとすることで、日本人は勤勉である。だから、学問の進歩とは、より新しい学説を探ることであり、文学の進歩とは、より新しい流派を見つけることである」。

という一説をひいて、10代の終わりに、「日本の近代と中国の近代」という論文で、日本の近代について考える、あるいはその知的な伝統につい

て考えるということをはじめと言われました。これが私にとってはショックでした。10代の終わりに、私は、そんなにもを考えていたかなと、深く反省するというか、愕然としました。あらためて三十数年経って、能力の違いに目覚めるという感じでした。

私は18歳のときに「近代とは何か」を読みました。そこで注目したのは、日本の学問の総体の問題よりも、そこに書かれていたE・H・ノーマン (Edgerton Herbert Norman) のことでした。ノーマンが、「日本の兵士と農民」という論文のなかで、隠岐島コミューン (commune) に触れていると、隠岐島コミューンは「人民側の文献が何もない」というその1行だけで、ノーマンは、日本の近代の学問を全面批判していると、書いてありました。

このような一節に、私はショックを受けました。そして、少なくとも伝承くらいは残っているだろうと思い、19歳の冬(2月)に隠岐の島に行きました。それ以来、42年間、隠岐の島とのかかわりを持ち、『隠岐島コミューン伝説』を書いたりしました。また、この12年は「隠岐学セミナー」を隠岐の島で実施しています。

私はそういうところで、まず体が先に飛び出していってしまうという、よく言えば現場主義でしょうけれど、ものを考える資質としては、ずいぶん浅いと反省させられました。

しかし、岡山さんが、竹内さんが中国に留学しているときに、非常に自堕落な生活とも言えるようなところから、「無」であるような自分というものを意識するところから、思想形成を始めなければならなかったということに関しては、私も共感したことであります。

「北京日記」を読んでいると、ほとんど思想家像は見えてきません。思想のかたちが浮き上がってくるというか、立ち上がってくるような状態がないわけです。これは、精神的なアナキー (anarchy) とかデカダンス (decadence) と言ったほうがいいということです。その従業員(女給さん)

と一緒にお酒を飲んで、私が「女にしなだれかかっている」と書いたところ、鶴見さんと同じ世代の安田武さんから「竹内好ともあろう者が、女にしなだれかかったりするものか」と、『朝日ジャーナル』の書評に書かれてしまいました。そういうところは、「松本が一番だらしがない」と書かれた覚えがあります。

しかし、そういうアナキーともデカダンスとも言える「無」から、実は何かが立ち上がってくるのではないのでしょうか。あるいはそれを経験して思想を立ち上げてくる竹内さんは、学者になろうとして学者になった東大の学者を、竹内さんはよく批判をしていました。例えば、『戦後日記抄』のなかに、「日本の学者の代表ならば東大へ探しに行けばいいかもしれないが、中国の学者は野にいます。統治者がどんなに異見をかり集めても、彼らは身を隠す術を知っている。孔子だって隠者にはかなわなかった」という文章があります。

そのように考えると、竹内さんは文化大革命に対して何も言わなかった、何も言わなかったというの、実は「無」の立場ではあるけれども時代に対する、あるいは中国の文化大革命に対する批判の言葉であったというようにも読み解いていけるのではないのでしょうか。

われわれの世代にとっては、ある意味では竹内さんの弟子に近いともいえる高橋和巳さんは文化大革命に対して全面的にもろ手を挙げて賛成し、『新しき長城』という本を書いて、中国の紅衛兵の少年たちの目は輝いているという言い方をし、評価をしました。

私は、戦争中の日本の軍国少年の目も輝いていたと考えています。そのような中国の文化大革命のなかに入って行って目が輝いている少年を見て、それは中国の希望であるというかたちで、全面的に認めてしまう高橋和巳さんに対しては、むしろ批判的でした。

あのような玉砕戦法みたいなものは、私は感情的には好きですが、しかし、そんなことで歴史を

見てはいけないのではないかと思います。

竹内さん自体は、どちらかというと文化大革命については、その当時の状況では、興味を持つというよりは好意的に見ていた側面がありました。ところが、岡山さんの報告にも名前が出てきました保田與重郎も、中国の文化大革命に対して非常に好意的に書いています。竹内さんの文化大革命に対する沈黙を守りつつ、批判の言葉としての沈黙を示しつつ、感情では肯定しているところだと保田與重郎の文書で書かれています。文化大革命に対して肯定しているというところは、ある程度、通じる部分もあります。しかし、竹内さんは、それに対して沈黙を守ったというところに、批判の言葉も入ってくるのではないかと考えています。

●—司会 面白いコメントありがとうございます。どうぞご自由に発言してください。孫歌さんか溝口先生、お願いできますでしょうか。では、溝口先生、お願いいたします。

●—溝口 今日は魯迅の話がお二方から出ました。辛亥革命のころの魯迅の位置付けについて考えていることをお話しします。辛亥革命以前、日本に留学していたころの魯迅は、革命青年で激的な文章を書いています。それは、本当に革命的言辭、深い洞察と深い熱情がこもった文章を大量に書いています。しかし、それはあまり読まれていません。

むしろ1911年の辛亥革命に、彼が絶望して挫折して、沈黙すると。長い沈黙のあとに1917年に『狂人日記』を書くわけです。それは、魯迅研究をやっていたので、呐喊の意図は何なのか。ちょうど1915年に新青年社が誕生して、陳独秀たちが新しい文学革命を起こしているのに、それに水を差すような作品を次々と発表しました。それはいったい何なのでしょう。結論としては、民衆不在の発見であると。辛亥革命には民衆が不在だと、その民衆の存在を示さなければ、民衆と向かい合わなければ、あるいは民衆自身が立ち上

がることなしに、中国革命はないのだということ。彼は丹念に『阿Q正伝』、「藥の世界」、「風波の世界」を書いて示したのだと思っていました。

最近になって、魯迅の鬱屈の大きな背景がわかってきました。それは何かと言うと、今までは、辛亥革命は1949年の中華人民共和国の成立のための革命のように受け取られています。つまり、辛亥革命は不徹底なブルジョア革命、不徹底な反植民地革命、不徹底な反封建革命であると、すべての革命が1949年に成就されたという見方。あるいは、清王朝が倒れたのは、もともとの腐れきった枯れ木のような存在で、早く倒れるべきものが、1911年になってやっと倒れたという見方といろいろあります。

ところが、私の見方は違います。2000年に渡った王朝制度を最終的に倒した革命であると、これは大きな変動です。では、誰が倒したのでしょうか。今までは、革命家が倒したように思われています。そこに魯迅の鬱屈が出てくるわけです。革命家が倒したわけではありませんでした。革命家は、ただ叫んでいただけなのです。魯迅はそれを言っているのです。ただ、呐喊の声をあげているだけだと。実際に動いたのは、省の独立という形態に注目しなければいけません。王朝制度が倒れるときに、省の独立という形態で王朝が倒れる革命は、世界中であれ1つだけです。世界中で2000年も続いた王朝制度も中国だけです。

その前に、太平天国の乱が起きます。これは通常の革命方式を採っています。それはどのような革命方式かと言うと、民衆反乱軍が中央に攻め込んで、中央政府を倒して、自分たちが新たな中央になるというものです。つまり、中央集権国家が、次の中央集権国家に変わるという王朝革命の1つの事例です。結局、太平天国の乱は失敗に終わりました。

この次の革命が辛亥革命です。省が独立します。つまり、これは中央集権制が解体されるということです。王朝制度は中央集権制であってはじめて

成り立つ国家体制です。省が独立してしまうと、王朝の命脈を保つことができず解体に至るわけです。では、省の独立をもたらしたものは何なのかということになります。

結論を言うと、それは民間の力です。民間の力は、具体的に言えば、太平天国の乱のときに、湘軍という軍隊をつくりました。湖南省のことです。湖南省を守るために、湖南省の曾国藩という大将が湘軍という軍隊を編成しました。この湘軍をつくったのは民間の力です。そのとき、清王朝は既に軍隊編成能力を失っていました。任せているのです。任せざるを得ないのです。

そして、軍資金、鉄砲、武装兵備など、湖南省の有能な青年たちを上から部隊長に任命し、小隊長にし、下士官にし、兵卒にしと。全部、上からネットワークで編成していくわけです。これは太平天国の乱に対抗する地方の軍隊のはじまりです。

この軍隊を編成させる力が民間の力です。このことについて、『思想』の9月号に「辛亥革命の歴史的な性格について」という論文を発表することになっていますので読んでいただければと思います。

民衆の力というのは、具体的には「きょうしん」の力なのです。「きょうしん」というのは「郷紳」という字です。英語ではジェントルマンです。郷紳層の力が主要な力です。彼らが最終的に独立するだけの軍事力、経済力、社会力、政治力、文化力、これらを掌握するのです。掌握するということは、省の独立ができるということなのです。それによって辛亥革命が倒れます。

魯迅たちは、そういう経緯を見ていないのです。自分たちが存在している社会自体が郷紳の社会であり、民間の力の社会であり、変わったことは何もない、それが辛亥革命の主力でした。革命青年たちは、ヨーロッパの革命思想に影響を受けて激しい議論をしています。岩波書店から出ている『原典中国近代思想史』という本の辛亥革命前後の革

命言辭、そういうものだけを受け止めていますから、魯迅の暗黒感をいまひとつ理解できませんでした。結局、魯迅が暗黒のなかにあったというその「場」は、まさに辛亥革命そのものの歴史的な性格に規定されていたということをお願いしたいわけです。

そこが理解できれば、魯迅の「暗黒」という言葉が一人歩きをして、まるで当時、中国が暗黒であったかのような見方が出てくることを防ぐことができると思います。以上です。

●—司会 ありがとうございます。溝口さんは、今の議論を持論とされていて、新しい視点に挑戦されています。今の話はコンパクトで非常にわかりやすかったのではないのでしょうか。では、続いて孫歌さん、お願いします。

●—孫歌 お二方の発表のなかで言及された2つの「沈黙」について、簡単なコメントをさせていただきます。

岡山さんは、「北京日記」の時期の竹内好の「沈黙」について、とても鋭いコメントをつけられました。そして、その沈黙のなかから文学精神の自律性という問題も抽出されました。非常に面白く受け止めました。ただし、1つ付け加えたい問題があります。それは、文学精神の自律性を論じるときに、竹内好における自律性の特徴性について、もっと岡山さんの意見をおうかがいしたいと思います。

つまり、竹内好は、魯迅のなかで文学と政治の関係について、とても微妙な定義をしました。魯迅のような文学者にとって、政治は自分の活動の場であって対立するものではありません。だから、竹内は、私たちの常識としての理解、つまり文学と政治は2つの対立するものとは考えていないわけです。「北京日記」を書いた時期においては、北京という文化中心のなかで大きな変動がありました。つまり、そのときの北京の知識人たちは、このお城を捨てたのです。だから、空っぽな文化の中心地になったわけです。そのとき、竹内好は



中国の文化人と付き合おうとしても付き合う術がありませんでした。

そういう具体的な状況に対して、彼は手紙のなかで自分の反応を書きました。かなりラジカル(radical)な反応でした。私は、「支那字、支那語」、そういうものが大嫌いです。日本語は美しいです。どうして、このような話をするのかというと、岡山さんと一緒に考えていきたいと思うからです。

薛毅さんについてのコメントですが、竹内好は、確かに文化大革命の間に沈黙の態度を取り続けましたが、そうでもない面もありました。文化大革命の直前に郭沫若が批判されたときに、ある記者に対して次のように話しました。「政治的不動な日本社会にとって、これは大事件になるかもしれないが、中国のように、いつも変動している社会にとって大したことはないだろう。そして、いつか毛沢東本人もやられるでしょう」と。これはあたかも、そのあとの歴史を予言したように、はっきりと言って、そのあとに沈黙しました。

この「沈黙」をどのように理解すればいいのか、これについても、午後の発表のなかでもっと詳しく展開したいと思います。以上です。

●—司会 ありがとうございます。あとお二人、報告者以外で発言していない張寧さんと黒川さんですが、どうしましょう。ご発言されますか。張寧さん、一言ありますか。

●—張寧 刚才你说的这个发言呢，我通过翻译听懂了。很受启发，好像她关注的点和我通过汉语的竹内好所关注的点有很多接近之处，有还要仔细捉摸，如果有机会也会在私下和岡山女士交流。薛毅

的我在以前就读过这一篇，当然也是会议给我寄的材料。他对文革的看法确实是超越了80年代以来的中国对文革的意识形态的解读，我觉得他跨出了一大步，那么再往前怎么走，还可以讨论，再往前对文革如何评价我与薛毅先生就有一些分歧了。但是他对这20多年来一直这么解读文革的这种意识形态的颠覆我觉得对我还是很有启发的。

●—司会 今、中国では文化大革命研究は公式に認められていない状態です。しかし、文化大革命の評価については、断片的にいろいろなところに出てきています。ご存じのようにもともと1981年に出された公式評価では文化大革命を全面否定しています。しかし、近年に至って、少し違う評価が出てきました。今後どうなるかわからないという側面もあります。

とりあえず、壇上からのコメントはすべて出ましたので、フロアに戻したいと思います。では、手を挙げておられる方が何人かいらっしゃいますので、最初に手を挙げられたこちらの方からお願いします。

●—質問者 大変良いお話を次々に聴かせていただいております。文化大革命について、竹内好が発言をしなかったことについて、私の感じていることですが、これは中国人自身の問題だという意識、日本人の問題というよりも中国人が解決しなければいけないと考えたのではないかと考えています。

孫歌さんは『竹内好という問い』のなかで、竹内は戦前も転向しなかったし、戦後の考え方を変えていないと、その点では、鶴見さんの見方は間違っていると指摘しています。

もし、転向していないのだとすれば、一貫して文化大革命も視野に入っていたはずですが。それは文学者として、思想家として、戦後は社会運動家としての竹内好があったはずですが。社会運動家として見た場合には、文化大革命について発言する資格がないと思ったのではないかと私は考えています。そうしないと、つじつまが合いません。

特に転向について言えば、昨日の張寧さんの話のなかで、「改心」という言い方をしましたが、日本の「改心」と意味はまったく違うのだと思います。

ですから、中国の近代化と日本の近代化を並べたときに、時代的なずれがありますから、それに対して、竹内は先を見ていたのではないかというのが、私の印象です。したがって、「竹内がなぜ黙っていたのかわからない」というのは、あの時代から言うと、私は1936年生まれで70歳ですが、遅れてきた青年の1人ですが、竹内の沈黙がわかるような気がします。孫歌さんの本を読んで、何かよくわかったような気がしました。以上です。

●一司会 まとめて先に質問を受けて、それから壇上に戻したいと思います。次の方、お願いします。

●一質問者 昨日から話をうかがっていて2つの思いが交錯しています。1つは、学問に対する尊敬と畏敬の念、特に張寧さんと薛毅さんのお話については、非常に高い関心を持ちました。私は、現代中国について考える場合に、竹内好と魯迅を通してしか向き合うことができないのだろうかと思います。

タイトルの日本と中国と世界をつなぐ共通の普遍的な価値観は何かということが、これから出るのかもしれませんが、今のところ、そのことについて触れられたのは、私の聞いた範囲では薛毅さんだと思います。このレジュメを見みると民主化、あるいはデモクラシーについて触れているのは薛毅さんだけです。私ども日本人が300万人の人間を失って、アジアで多くの迷惑をかけた最大の教訓は何かということ、デモクラシーというものをやっと60年経って自分のものにし始めたということです。これからの中国はどのような方向と理想に向かっていくのか、ということは最大の関心事です。

それから文化大革命について、日本人の立場からコメントしたいと思います。私は、文化大革命

が起きたときに熱狂的に支持をしました。労働者でしたから。当時はまだ国交回復する前に、訪中して文化大革命のときの中国の人たちを見てきました。今から考えると、その理念に魅せられたわけです。しかし、実態を見てみると、とんでもないと。中国の方はすごい実験をしたと。そして、私たちに教訓を残してくれたと。

だから、私たちはどちらかというところ左翼について非常に甘いところがありますが、左翼についてももっと厳しく見ていかなければいけないということ学びました。後段について普遍的な価値が何かということが出るかと思いますが、とりあえずエールを送りたいと思います。

●一司会 もう一度、手を挙げてください。では、次の方お願いします。

●一質問者 岡山さんと薛毅さんにおうかがいしたいと思います。岡山さんは、私の娘とほぼ同じ世代で名前もよく似ているので、同じ世代でこのような人が出たのだなと感慨を持って聞いていました。昨日からこのレジュメを読んで、今日の話もうかがって、いまひとつよくわからないという印象がありました。論創社の本を読もうと思ったら、この車道校舎の図書館にはなくて、豊橋校舎の図書館にはあるということで、今、取り寄せてもらっている最中で、まだ読んでいません。

つまり10代から二十歳にかけて、魯迅、竹内好を読んで、問題意識を持ち、その学者の道に進むということは、どのようなことだったのでしょうか。つまり、魯迅を読んで、竹内好を読んでというと、それは学者になる道を、どこかで引っ張るような要素になるのではないかというのが私自身の理解ですが、そのあたりがよく見えていません。

岡山さんの核みみたいなものが、私にはよくわからないので、その点、岡山さんはどのように考えていらっしゃるかをおうかがいしたいです。

それから、薛毅さんのお話のなかで、竹内好が日本の憲法について触れていたということをおつ

しゃっていましたが、実は、壇上のパネリストの方々は、日本国憲法の問題についてはどなたも触れていません。おそらく、私も含めてここにいる方はそうだと思いますが、戦前の日本の憲法、あるいは戦後の憲法をしっかりと読み込んでいる人はほとんどいないのではないかと思います。もし、薛毅さんが戦前の日本の憲法を読んでいるとしたら、どのような印象を持たれたのか、それをおうかがいしたいと思います。

●—司会 続いてお願いします。

●—質問者 岡山さんの話を聞いて感じたことと、昨日の溝口先生のお話を聞いて、溝口先生におうかがいしたいことがあります。

まず、今日の岡山さんの話を聞いて、もう何十年も前に、私が学生時代に北村透谷を読んでいた。その北村透谷を思い出しました。昨日も少し名前だけは出たのですが、北村透谷が自由民権運動にかかわって、その後キリスト教にも触れて、のちに自分が文学者として立とうとしたときにいた場所は、彼は実際の世界に対して、自分は想世界の住人だと言っていたと思います。想世界を打ち立てるようなことを言っていたと思います。その場所が、竹内好が文学精神を生み出そうとした場所と似ているなと思いました。

おそらく北村透谷は、明治以降に西洋のいろいろな思想が入ってきて、そのなかで自分の考え方や自分の思想を何とか打ち立てようとする人がぶつかる問題に、正面から最初にぶつかった人ではないだろうか、というのが私の北村透谷の感想です。何十年か前に読んだだけで、私は研究者でもありませんので、その後、深めてはいませんが、ずっとそのことがひっかかっています。それを岡山さんの話を聞いて思いました。

その自律的精神というのが、竹内好において本当にその自律的な精神が獲得されたのかどうか、これは竹内好に限りませんが、それをまた今後、考えていきたいなと思います。

それから溝口先生のお話は、私がまったく知ら



ないことをお聞きして、とても新鮮でした。

地方自治があったということをおっしゃいましたが、日本の農村のコミュニティーと中国の農村におけるコミュニティーの違いについて。近代化の過程で、今の日本のコミュニティーは特に高度成長期以降、ほとんど崩壊、変容してしまっていますが、近代化以前の日本と中国のコミュニティーの違いと、現在、中国のコミュニティーがどのようになっているのか、ということをおうかがいできればと思います。以上です。

●—司会 はい。まだ、お二人の方が手を挙げていらっしゃいますが、時間の関係がありますので、壇上に戻したいと思います。もし時間がありましたらお願いしたいと思います。まだ午後の時間もありますので、とりあえず岡山さんと薛毅さんのお二人からフロアからの質問にお応えいただきたいと思います。まずは岡山さん、お願いします。

●—岡山 コメントありがとうございます。先生方からのコメント、フロアの皆さんからのコメントを通して、私自身は1つ共通するものを感じました。

私自身は、なぜ竹内好を研究するのか、おそらくこれからも研究していくとすれば、なぜ研究しつづけていくかということへの私なりの答えを示すことができればと思い、報告の冒頭で非常に個人的な、竹内を読み始めるきっかけの体験をお話しました。

そしてそれを前提として、これまで研究してき

たことをお話しさせていただきました。それは「文学」ということの意味の仕方をめぐる問題です。例えば、「北京日記」の読み方ひとつにしても、「文学」という言葉を手がかりにして、いろいろな人間関係も、その文学をめぐる精神態度に読み替えていくという方法をとってきました。そうすることによって、1つの竹内像を提示することができたと思います。

ただ、その反面、溝口先生が教えてくださった辛亥革命の実際の中身の話とか、菅先生のご指摘にあった文化大革命をめぐる具体的な人間関係の部分で、沈黙を強いられるような背景が、彼のなかに事情としてあったのではないかという話とか、孫歌先生の「空っぽの北京」を、実際にどのように考えるかといった側面、つまり実際に彼が中国で見ていたものや歴史の実体をどのように受け取るかということに関して、私自身の答えが出せていなかったり、論理を裏付ける実体に関する分析が、まだできていなかったり、そのような点について自分の発表について考えさせられるコメントをいただいたと思います。

実際の中国、実際に彼が生活して体感した中国、あるいは実地の研究から出てくる中国の辛亥革命などの状況を踏まえた場合、自分の竹内の読み方をどのように掴み直していくのか、ということ非常に考えさせられました。これもまた、自分の読み方に、引き付けたコメントですが、今、出していただいたコメントを、そういう思いを持って受け止めています。

●—司会 では、薛毅さん、お願いします。

●—薛毅 首先谈一下我读竹内好的演讲《我们的宪法的感受》的感受。我当然没有读过日本的旧宪法或者新宪法，也没法说出我的判断。我是把它当作方法来读的。这个方法是如何对待我们本土的经

验传统和以某种不好或者不太正确的形式来实践的历史现象的态度。这让我想起鲁迅对待迷信的态度，鲁迅很早在日本留学期间写过的一篇文章里边，提到了接受了西方科学新思想的人对待中国的迷信是要驱除它，可鲁迅说了相反的意见，他把那些接受新思想的人称为“伪士”，他说伪士当去，迷信可存。这也是鲁迅对待本土的传统和形式的一种非常独特的态度，我想他和竹内好有相通的地方。第二个问题稍微谈一下文化大革命。关于它的说法是有林林总总的，但是现在主流的说法是来自于官方和知识分子，因为这两批人在文革中受到的冲击最大，而文革之后他们有话语权，我觉得应该重新阐释文化大革命，但是我的意思不是说由此而全面肯定文化大革命。当然我认为文化大革命中有一些绝对可以肯定的地方，比方说在中国建立了覆盖面非常非常广的医疗保障制度，这对全世界而言是一个创举。还有文化大革命关于教育革命的理念和思想也是有很多值得肯定的地方的，我想我们对文革的一个比较混乱的态度来自于我们没法分清文革理念和文革时代，这是两个概念，所以我们会把文革时代的灾难和文革时代的理念直接联系起来。当然我并不是说这个理念和文革时代的灾难是没有联系的，但是我们需要仔细地区分地看待文革中出现的种种暴力行为，比如，一个反抗者使用的暴力和一个欺压者使用的暴力应该是不一样的。

●—司会 薛毅さんの最後の文化大革命評価は、先ほど言いましたように、今、中国のなかに徐々に表れつつある新しい評価の1つです。必ずしもまだ何も結論は出ていませんが、場合によっては、これから文化大革命研究が自由になるという時代が来たときに、ある論争が起きることが、ほぼ予見できる状況にあることがわかったかと思っています。

では、午前の自由討論を終えたいと思います。